



沖縄県内には、明治から昭和にかけての戦争の痕跡が数多く残されています。これらは戦争遺跡や戦跡と呼ばれ、平和学習等に活用されてきました。

中でも、沖縄陸軍病院南風原壕跡群は、戦争遺跡の保存・活用を語る上で欠かすことのできない遺跡です。南風原町教育委員会は考古学的手法を用いた発掘調査を実施し、その重要性から全国に先駆けて1990(平成2)年に同遺跡を町の「史跡」として指定しました。

その後、沖縄県教育委員会は、1998～2006(平成10～18)年に、県内にある戦争遺跡の数や種類などを把握するために、分布調査を実施しました。また、2010～2015(平成22～27)年には、1077件の戦争遺跡のうち、145件を対象として、より詳しい調査を実施しました。

熾烈を極めた沖縄戦に関係する戦争遺跡は数も多く、司令部壕跡や陣地壕跡、砲台跡の他、飛行機を格納するための掩体壕跡、体当たり攻撃に使う小船を隠すための特攻艇秘匿壕跡、病院壕跡、住民が逃げ込んだ自然洞穴(ガマ)、被弾した石垣や建物、米軍の侵攻を遅らせるために旧日本軍が破壊した橋、捕虜収容所跡等種類も様々です。

沖縄戦以前の遺跡は、台湾の監視と軍事上の目的から、鹿児島県大隅町から台湾基隆にかけて敷設された海底電線の中継施設のひとつとして1896(明治29)年に設置された石垣市の元海底電線陸揚室(電信屋)や、日露戦争開戦をきっかけとして、東シナ海を往来する船舶を監視するために1904(明治37)年に設置された糸満市の喜屋武海軍望楼跡、昭和の初めごろから各地の学校に設置された御真影や教育勅語を保管するための奉安殿等、89件あります。

かつては、開発によって記録も残されないまま消えていく戦争遺跡が数多くありましたが、現在は他の時代の遺跡と同じように発掘調査を行い、記録を残す事例が増えています。戦争遺跡は「歴史の生き証人」として今後ますます重要となるため、しっかりと保存・活用し、未来へ継承していく必要があります。

## 用語解説

### ●史跡

文化財の種類の一つ。貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅、その他の遺跡。

### ●熾烈

勢いが盛んで激しいこと。

### ●御真影

天皇・皇后の公式の肖像写真。

### ●教育勅語

天皇のことばとして、1890(明治23)年に発令された国民道徳の基本。戦前、日本の教育理念の基礎となった。1948(昭和23)年に失効。



○ 沖縄陸軍病院南風原壕跡群 20号壕内部(南風原町)



○ 当間海軍砲台跡(那覇市)※航空自衛隊那覇基地内



○ 公益質屋跡(伊江村)



○ 元海底電線陸揚室(電信屋)(石垣市)



○ 美里小学校の奉安殿(沖縄市)

【参考文献】

・沖縄県立埋蔵文化財センター. 2015. 『沖縄県の戦争遺跡:平成22~26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書』.

# 与那原町

しま めーばる

# 島ノ前原

いせき

# 遺跡

与那原町上与那原



26° 11' 58.38" N  
127° 45' 12.84" E



## 用語解説

### ●第一尚氏

尚思紹を始祖とし、7代目の尚徳まで64年間(1406～1469年)続いた王統。1429年、2代尚巴志のとき三山を統一した。

### ●尚巴志

1372年生まれ、1439年没。21歳のときに佐敷按司となる。その後、第一尚氏王統第2代の中山王となり、18年間(1422～1439年)在位した。三山に分かれていた琉球を1429年に統一した。

### ●三山統一

14世紀から15世紀にかけて、沖縄島にあった3つの王国。北から山北(北山)、中山、山南(南山)。それぞれの国が独自に中国と外交関係を持っていた。



旧地形から遺跡の範囲を推定すると、大規模な集落遺跡だったと考えられるが、公園整備や宅地造成で大部分が破壊されてしまったのだよ。

## 遺跡近景



## 製鉄の伝承が伝わるグスク時代の遺跡

島ノ前原遺跡は、町内で確認されている中で比較的古い時代の遺跡です。この遺跡では、グスク時代にあたる14～15世紀の遺物等が発見されています。

与那原町には、第一尚氏を築いた尚巴志が三山統一の前に与那原の人々に製鉄の技術を教えたとの言い伝えがあります。この伝承は、遺物の年代と一致し、鉄製品も出土していることから、その時期の人々の生活を知る手掛かりとなる遺跡と言えます。

### 【参考文献】

- ・与那原町教育委員会。1996。『与那原町の遺跡』。
- ・与那原町史編集委員会編。1988。『与那原町史：序説・むかし与那原』。与那原町役場。



与那原町内では古い時代にあたる遺跡なんだね。



湧田村は、かつて現在の県庁から楚辺、壺川のあたりにかけて広がっていた「湧田窯」という焼物生産地でした。湧田は文献や言い伝で琉球王国の主要な窯であったことが知られていましたが、その実態は長い間不明でした。しかし、1986(昭和61)年、行政棟建設のため土地を掘削したところ、大量の瓦片が発見されました。これをきっかけに緊急発掘調査が行われ、焼き物の破片、窯、土採場、工房、井戸等が続々と出土し、いにしへの湧田窯がその姿を現したのです。

さて、焼き物の窯といえば、登り窯が頭に浮かぶのではないのでしょうか?発掘調査にあたった専門家たちもそうでした。ところが県庁行政棟の予定地からは饅頭型の平窯が出てきました。しかも6つも!窯の内部は器を置く焼成室と薪を燃やす燃焼室の間に段差がつけられ、その部分が塼で補強されています。この形の平窯は東南アジア・中国南部のものと似ているとも言われ、その起源にかかる興味は尽きません。平窯のうち、状態の良い2基は切り取り保存され、1号窯は沖縄県立博物館・美術館に、2号窯は那覇市壺屋焼物博物館に保存・展示されています。是非、本物も観てみて下さい。

湧田窯跡からは、瓦と塼が大量に出土しています。瓦は今でこそ身近な建築資材ですが、王国時代は高級品で、これで屋根を葺くことは建物とその持ち主の威厳を高める効果がありました。王府は、首里城や寺院、役所などの建物には瓦を使う一方で、一般庶民の使用を禁じています。塼は、瓦と質の似た建築素材で、直方体をしています。平べったいものや厚みのあるものがあり、タイルのように床に敷いたり、積み上げて壁を作ったりします。現代のレンガにあたるものと考えてよいでしょう。

また、湧田から出土する面白い資料に「植木鉢」があります。はじめは陶器より低い温度で焼く「瓦質土器」で、のちに荒焼にかわって行きます。本土で植木鉢が普及するのは18世紀ですが、琉球では16世紀に現れますので、沖縄は日本の園芸文化の最先端を行っていたといえるのかも知れません。実際、薩摩から注文を受けて製作していた記録も残っています。鉢表面の花や線の模様もなかなかモダンなものです。当時の人たちはいったい何を植えていたのでしょうかね。ソテツ、それともランでしょうか?

瓦質土器と荒焼の話をしたが、実は発掘が行われ大量の瓦や荒焼片が出土するまでは、湧田と言えば「上焼」というイメージでした。上焼というのは釉薬のかかった色彩豊かな陶器のことです。湧田では平田典通や仲村渠致元の活躍もあり、本場中国にも匹敵するような技術を備えていたことがうかがわれます。1807年の文献では、薩摩から琉球に「近頃中国産と称して琉球で作ったニセモノを輸出してないか?」という疑念を呈しています。それに対し琉球は「ニセモノの生産は禁止してます～」という返事。ニセモノ生産があったことを暗に認めつつ、薩摩側の疑念を払拭しようとしています。たくましいですね。

1862年、湧田窯は美里郡知花窯、首里宝口窯とともに壺屋に統合されたとされています。このとき湧田窯は閉鎖されたのでしょうか?どうもそうではなさそうです。「湧田の名工」として知られる仲村渠致元は1690年代の生まれですし、致元が1731年に美栄地(久茂地あたり)の瓦製作所を湧田楚辺に移すことにしたと記した文献があります。明治初年の『首里那覇図』でも、壺屋と並んで湧田村からも煙がのぼっています。湧田村の終焉はいつなのでしょう?



瓦・塼・煉瓦



植木鉢

【画像提供】沖縄県立埋蔵文化財センター

いはは  
**伊良波**  
ひがし いせき  
**東遺跡**

豊見城市伊良波



26° 10' 23.43" N  
127° 40' 22.27" E



用語解説

●青磁

釉薬が緑か青色系の色調となる磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本、ベトナム、タイ、ミャンマーなどで生産されている。日本や沖縄で出土する中国産青磁の多くは、元から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で生産されたもの。

●白磁

白磁の素地に透明釉をかけ、高温で焼成した磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本のほか、ヨーロッパでも生産される。沖縄で出土する中国産白磁は、稀に定窯産もあるが、大部分は明代の景德鎮や中国南部を産地とする。

●カムイヤキ

奄美諸島に属する徳之島伊仙町の山中に分布するカムイヤキ古窯跡群で、11～13世紀に生産された無釉の焼締の陶器。鹿児島県の薩摩半島から琉球列島全域に分布する。

●黒曜石

火山岩の一種で沖縄では産出しない。ガラスとよく似た性質を持ち、割ると鋭い断面を作る。世界各地でナイフや矢じりなどの石器として使われた。日本では九州以北の地域で産出する。

●石鏃

石で作った矢じり。

住居跡



1985年、伊良波小・中学校の建設工事中に見された遺跡です。調査により、グスク時代(約900～600年前)の住居と考えられる柱の跡等が発見されました。遺物として、グスク時代の中国産青磁や白磁、鹿児島県徳之島産カムイヤキ等が出土し、弥生～平安並行時代Ⅰ～Ⅲ期(約2300～1700年前)に相当する土器も一部で出土しています。また、豊見城市内で唯一となる九州産黒曜石の石鏃が発見されました。これらの出土遺物から、島外のさまざまな地域と交流があったことがわかります。

豊見城市では、この遺跡が一番古いものでしたが、小・中学校の建設により消滅してしまいました。しかし、発掘調査の成果は過去の生活の一端や移り変わりを示す貴重な資料と情報を私たちにもたらししてくれます。

【参考文献】

- ・豊見城市教育委員会。1987。『伊良波東遺跡』。
- ・豊見城市教育委員会。1986。『伊良波西遺跡』。
- ・豊見城市教育委員会。2011。『豊見城市の遺跡』。

グスク時代には伊良波小・中学校の辺りで人々が暮らしていたんだね。

グスク時代の中国産陶磁器、徳之島産カムイヤキ、九州産黒曜石が見つかったことから、沖縄島以外の地域と様々な交流があった事がわかるのだよ。

● 発掘調査風景



● 溝状遺構



豊見城市内で唯一となる黒曜石の石鏃を発見



● グスク土器



● グスク土器



● グスク土器



● 尖底土器



● グスク土器



● 石鏃



● 中国産陶磁器



● 石器（敲石？）

# とみぐすく 豊見城 グスク

豊見城市豊見城



26° 11' 21.01" N  
127° 41' 5.31" E



## 用語解説

### ●山南王

沖縄島南部を南山といい、その南山を支配した王統。南山とは山南の俗称で、山南の山は「島」の意味。

### ●汪応祖

生年未詳、1414年没。山南王統の王。在位11年(1404年～1414年)。山南王となる前に豊見城グスクを築き、ハーリーを行ったという伝承が残る。

### ●城郭

城内の平場を土塁や石垣などで囲んだ区域の名称。

### ●第二四師団第二野戦病院壕

通称「山部隊」が使用した病院壕。沖縄戦時には建物の病院ではなく、地下に壕を掘ったり、自然の洞穴(ガマ)を利用して病院とした。

### 【参考文献】

- ・豊見城村史編纂委員会。1964。『豊見城村史』。豊見城村役所。
- ・豊見城村教育委員会。1986。『伊良波西遺跡』。
- ・豊見城市教育委員会。2011。『豊見城市の遺跡』。

●城門の一部



●戦中の城門【画像提供】沖縄県公文書館



今は空手会館があるんだね。



字豊見城の標高約50mの丘陵上に築かれたグスクです。グスクを築いたのは、のちに山南王となる「汪応祖(おうおうそ・わんおうそ)」と言われています。資料・伝承によると三つの城郭からなるグスクだったようですが、現在では城壁の一部が見られるのみです。

2014～2017(平成26～29)年に遺構確認調査を行ったところ、一部に城壁の基礎部分が確認されました。

1973(昭和48)年には「豊見城城址公園」として開園し、多くの人々に親しまれましたが、2003(平成15)年に閉園し、現在はその一部に沖縄空手会館が整備されています。

また、グスク北東側の崖面には、戦争遺跡として旧日本陸軍が構築した「第二四師団第二野戦病院壕」が残っています。

● 遠景 (2002年撮影)



ハーリー由来の伝承が残る  
国場川を望む丘陵に築城されたグスク。

中国産の青磁やグスク土器などが出土しているよ。昭和初期に撮影された写真には、石積みの城門や城壁が写っているよ。



● グスク土器



● 青磁碗



● 石積み検出状況



● 石積み検出状況



# サキタリ洞 遺跡

南城市玉城字前川



26° 8' 30.54" N  
 127° 44' 48.12" E



## 用語解説

### ●サキタリ洞

南城市玉城字前川にある洞穴。かつてはサキタルガマ、斗牛洞とも呼ばれた。「サキタリ」は酒造りの意味で、洞穴で酒造が行われていたことに由来する。

### ●貝器類

貝殻でつくった道具。

### ●石英製石器

石英で作った道具。石英はチャートや黒曜石に比べて石器製作は難しいが、分布が広く入手しやすいので石器としてよく使われる。サキタリ洞は石英の産地から30km以上離れているため、人の手により運ばれてきた事がわかる。

### ●押引文土器

土器の表面にわりばし状の工具で押したり引いたりして付けた模様(押引文)を持つ土器。

### ●岩陰囲込墓

岩陰などを石積みで囲い、遺体や遺骨を納めた厨子甕等を納めた墓。集落単位の墓所として用いられることが多い。グスク時代から見られ、近世に多い。

● 陥没ドリーネ内に開口した東側洞穴



サキタリ洞遺跡は、南城市玉城に所在する観光施設おきなわワールドのガンガラーの谷内に位置する洞穴遺跡です。2009(平成21)年度から沖縄県立博物館・美術館による発掘調査が行われ、過去4万年間の地層が非常に良好な状態で保存されていることが明らかになっています。これまでの発掘調査の結果、約3万年前の人骨、約2万3000~2万年前の人骨及び貝器類、約1万4000年前の人骨と石英製石器、沖縄最古の土器となる約9000年前の「押引文土器」、グスク時代(約900年前)の岩陰囲込墓など、多くの遺物、遺構が検出されました。中でも、約2万3000年前の巻貝製釣針は、世界最古の釣針として注目されました。また、旧石器時代の地層中からは、モクズガニやカワニナといった河川性の動物遺骸が数多く発見されており、ウナギやブダイ、アイゴなどの魚骨も見つかっています。こうした魚介類は、当時の人々の食料だったと考えられます。

これまで日本列島の旧石器人の主な生業は狩猟だったと考えられていましたが、沖縄の旧石器人は水産資源を活発に利用する個性的な暮らしを営んでいたようです。

### 【参考文献】

- ・沖縄県立博物館・美術館. 2018. 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書!』.
- ・山崎真治. 2015. 『島に生きた旧石器人: 沖縄の洞穴遺跡と人骨化石』. 新泉社.

●発掘調査の様子（調査区Ⅰ）黒く見える部分がⅡ層（約2万年前）



世界最古の釣針だって。何を釣っていたのかな。

## 世界最古の釣針が出土



●世界最古の巻貝製釣針（約2万3000年前）（全長1.4cm）

約4万年前までの地層が確認されたけど、これからの調査によっては、さらに古い堆積層が確認される可能性もあるのだよ。また数多く出土している貝器や動物骨は、当時の自然環境等、多くの情報を提供してくれるのだよ。



●人間の歯と貝器（調査区Ⅰ、Ⅱ層出土）



●動物遺存体（上段：モクスガニの爪、中段：カワニナ、下段：カタツムリ）